



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語の所有を表す接辞
Author(s)	梅谷, 博之; Hiroyuki, UMETANI
Description	特集 所有表現
Citation	北方言語研究, 2, 47-72
Issue Date	2012-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49252
Type	departmental bulletin paper
File Information	05umetani.pdf



[特集 所有表現]

モンゴル語の所有を表す接辞

梅谷 博之

(東京大学・人文社会系研究科研究員)

1. はじめに

本特集「ユーラシア北東部諸言語の所有を表す接辞の意味論と構文論」の「導入と総括」第1節で述べられているように、この特集は、ユーラシア北東部に分布する諸言語の所有を表す接辞について、言語間に見られる類似点と相違点を比較しつつ、より精密な記述を行なうことを目的としている。

この目的に沿って、本稿*では次のような構成でモンゴル語の所有を表す接辞について議論する。まず、「導入と総括」で扱われている各項目について、2節で、モンゴル語ハルハ方言の事実を概観する。その後の3節～6節では、所有を表す接辞に関する諸項目のうちいくつかを取り上げ、分析を加える。3節では、所有を表す接辞が屈折接辞的な特徴も有していることを見る。4節では、所有を表す接辞と共格接辞との異同を議論する。5節では、所有を表す接辞が、「普通所有物を表す名詞」に付加された場合に、派生語がどのような意味を表すかについて考察する。6節では、所有を表す接辞による派生語が、文末述語表現として用いられる場合の文構造を扱う。

2. モンゴル語ハルハ方言、および所有を表す派生接辞 *-TAJ* の概略

2.1 モンゴル語ハルハ方言の概略

モンゴル語ハルハ方言（以下「モンゴル語」と略す）は、モンゴル国の首都ウランバートルを中心に話されている。基本的な語順はSOVで、膠着型の言語である。母音調和の現象がある。本稿での例文の表記は、キリル文字による正書法に従い、ローマ字転写したものを用いる：a=a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ~tʃ], з=z [dz~ts], и=i, й=j, к=k, л=l [ɣ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [ø], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u [u], ү=ü [u], ф=f, х=x, ц=c [tsʰ], ч=č [tʃʰ], ш=š [ʃ], ь=ʹ, ы=y [i:], ь=ʹ, э=e, ю=ju/jü, я=ja.

2.2 所有を表す派生接辞 *-TAJ* の用法

モンゴル語の派生接辞 *-taj/-toj/-tej* は名詞（あるいは、後で述べるように名詞句）に付き、「～を有する、～持ちの、～付きの」という意味の語（や句）を形成する。*-taj*, *-toj*, *-tej* はそれぞれ、母音調和による異形態である。以下、異形態の形が問題になる場合を除いて、

* 本稿の議論は、2名のコンサルタント（1976年ウランバートル生まれの女性、および、1979年ウランバートル生まれの女性）から得たデータに基づいている。また、2名の査読者からも貴重なご指摘を頂いた。ここに感謝申し上げます。なお、本稿は平成22年～24年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)「モンゴル語の派生と複合の研究」(研究課題番号22720150)による研究成果の一部である。

この接辞を *-TAJ* と表記する。

-TAJ による派生語は、名詞・形容詞的に用いられる。例 (1) の *xüüxed-tej* および (2) の *širxeg-tej* がこれに該当する（他の名詞・形容詞と同様に、述語としても用いられる。(2) の *üne-tej* を参照)。また、副詞的に用いられて述語を修飾する場合もある¹ (例 (3) を参照)。なお、例 (1), (2) はコンサルタントによる作例である。(3) は Luvsanvandan (1968: 181) で、派生接辞 *-TAJ* による派生語が述語修飾する例として挙げられているものである。以下、出典情報のない例文は全てコンサルタントの作例による。

- (1) Tednijx olon **xüüxed-tej** ajl baj-san.
彼らのもの.NOM 多い 子供-PROP 家庭.NOM ある-VN.PAST
「彼らのところは、子だくさんの家庭であった」(直訳：彼らのものは多くの
子持ちの家庭であった)
- (2) Arvan **širxeg-tej**=n' jamar **üne-tej** ve?
10 個-PROP=3RD.POSS どんな 値段-PROP QP
「その 10 個入りのはいくらですか？」(直訳：その 10 個持ちのはどんな値段
持ちか?)
- (3) Či **zorig-toj** barild-aaraj.
君.NOM 勇氣-TAJ² 相撲をとる-TV.OPT
「勇敢に相撲をとりなさい」(直訳：君は勇氣持ちで相撲をとりなさい)
(Luvsanvandan 1968: 181. ラテン文字転写、形態分析、例文中の強調、グロス及び訳文は筆者による)

また *-TAJ* は、容器に入った内容物を表す際にも用いられる (Bosson 1964: 54)。この場合、「容器を表す名詞に *-TAJ* を付けた派生語」が「内容物を表す名詞」を修飾する表現 (例 (4a)) と、「内容物を表す名詞に *-TAJ* を付けた派生語」が「容器を表す名詞」を修飾する表現 (例 (4b)) の両方が存在する³。

¹ 4.1.3 節で議論するように、述語修飾語中に見られる *-TAJ* が、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* のどちらであるのかを判断することが困難になる場合がある。すなわち、例 (3) 中の *-TAJ* を派生接辞 *-TAJ* ではなく、共格接辞 *-TAJ* として見なす分析も、可能性としては残されている。ただし説明の都合上、4.1.3 節に入るまでは、派生接辞 *-TAJ* による派生語に、述語修飾の用法がある前提で議論を進める。

² 脚注 1 の繰り返しになるが、述語修飾語中に現れる *-TAJ* に関しては、派生接辞 *-TAJ* であるのか、それとも共格接辞 *-TAJ* であるのかを判断することが難しくなる場合がある。そこで述語修飾語中の *-TAJ* に対しては、派生接辞と共格接辞の別をグロスで表示し分けずに、一律に“-TAJ”と記した。

³ (4a) のように容器を表す名詞に *-TAJ* が付いた表現と、(4b) のように内容物を表す名詞に *-TAJ* が付いた表現の両方が可能であるが、(4a) と (4b) はそれぞれ異なる意味を表す。例えば「酒入りの瓶を割った」という意味を表すためには (4b) を用い、(4a) は用いない。

- | | | | | | |
|------|----------------|------|------|-----------------|-----|
| (4a) | šil-tej | arxi | (4b) | arxi-taj | šil |
| | 瓶-PROP | 酒 | | 酒-PROP | 瓶 |
| | 「瓶入りの酒」 | | | 「酒入りの瓶」 | |

さらに, *xereg* 「事, 必要」から派生した *xereg-tej* 「～する必要がある」や *jos* 「道理」から派生した *jos-toj* 「～するはずだ」など, *-TAJ* により派生したいくつかの語は, 直前に内容を表す形動詞節 (連体節) を伴い, 文末に現れることで, ある種の述語を形成する (Bosson 1964: 54, 風間 1999: 97). 例 (5) を参照.

- | | | | | | | |
|-----|---|-----|--------|--------------|-----------|-----------------|
| (5) | Ted | ene | ažl-yg | önöödör-t-öö | duusga-x | jos-toj. |
| | 彼ら.NOM | この | 仕事-ACC | 今日-DAT-REFL | 終わる-VN.NP | 道理-PROP |
| | 「彼らはこの仕事を今日中に終わるはずだ」 (直訳: 彼らはこの仕事を今日中に終わる道理持ちだ) | | | | | |

2.3 派生接辞 *-TAJ* が他の派生接辞と共通して持つ特徴

3 節以降の議論では, 派生接辞 *-TAJ* が屈折接辞的な特徴も有することを指摘する⁴. そこでここではまず, 派生接辞 *-TAJ* が, 他の派生接辞と共通して有する特徴を確認しておく.

派生接辞 *-TAJ* はモンゴル語の他の派生接辞同様, 語 (語基) に付き, 新たな語彙項目を派生する⁵ (ただし, 議論を先取りして述べると, 派生接辞 *-TAJ* は「句」に付く場合もある. 詳しくは, 3.1 節を参照). 例としては次のようなものが挙げられる.

- | | | |
|-----|------------|---------------------------|
| (6) | tolgoj 「頭」 | tolgoj-toj 「かしこい」 |
| | nüd 「目」 | nüd-tej 「物事を判断する眼力を有している」 |
| | xüč 「力」 | xüč-tej 「力持ちの」 |
| | čadal 「能力」 | čadal-taj 「有能な」 |
| | amt 「味」 | amt-taj 「おいしい」 |

⁴ 屈折接辞的な特徴を一部有する *-TAJ* を「派生」接辞と呼ぶことは, 厳密には避けるべきであるかもしれない. 本稿で *-TAJ* を「派生」接辞と呼ぶ理由は次の通りである: 4 節で議論するように, この接辞は共格接辞 *-TAJ* との異同が問題になる. 議論の過程において, この二つ (に区別される可能性のある) 接辞のうち, どちらが問題になっているかを示すために, 一部の先行研究に倣って (「共格接辞」に対して) 「派生接辞」と呼ぶことにした.

なお, 派生接辞的な特徴と, 屈折接辞的な特徴をもつこの「派生」接辞 *-TAJ* を, 最終的に「派生接辞」と「屈折接辞」のどちらとして分類すべきか (あるいは, どちらでもないものとして分類すべきか) は, 派生接辞的な特徴と屈折接辞的な特徴の両方を持つ, 他の接辞についても記述を進めた上で明らかになることである. 現段階では, 結論は保留する.

⁵ 橋本 (2010: 125) によると, *-TAJ* は「所有物の指示対象が[属性]に特化されるに従って, 所有表示接尾辞から形容詞形成接尾辞に文法化されていく». 筆者の理解が正しければ, この主張の内容を次のように言い換えることができるかもしれない: 例えば *čadal-taj* 「有能な」(能力-PROP) という語のように, *-TAJ* が付く語基 (*čadal*) が人やものの属性 (この場合には「能力」) を表すものである場合には, *-TAJ* はある語彙項目から別の語彙項目を派生する (橋本の表現を用いれば「形容詞形成」を行なう) という, (典型的な) 派生接辞的な特徴を示す.

も～」などの意味を付加する場合もあるが、この例や次の (9b) のように意味があまり変わらない場合もある)

(9b) ojlgomž-toj-xon

理解-PROP-DS

「(物・事が) 理解できる」(ojlgomž-toj 「(物・事が) 理解できる」)

また、他の(名詞を派生する)派生接辞同様、(意味的に許容される限り)派生接辞 *-TAJ* の直後に複数接辞や格接辞を付加することができる。(11)～(13)は、派生接辞 *-TAJ* の後に複数接辞が付いた例、(15)は、派生接辞 *-TAJ* の後に格接辞が付いた例である(派生接辞 *-TAJ* に格接辞が付きうことは Luvsanvandan (1968: 180) にも指摘がある)。なお、(10)、(14)には、*-TAJ* 以外の派生接辞の後に複数接辞や格接辞が付いた例を挙げ、*-TAJ* を他の派生接辞と比較できるようにした。

(10) ažil-tn-uud

仕事-DS-PL

「職員たち」

(11) onc dūn-tej-nūūd

優れた 結果-PROP-PL

「「優」を取った人たち」(onc dūn は、成績評価「優・良・可・不可」の「優」)

(12) xol ger-tej-nūūd

遠い 家-PROP-PL

「家が遠い人たち」(直訳：遠い家持ちたち)

(13) exner-tej-čūūd

妻-PROP-PL

「妻がいる人たち」

(14) Miniĵ čix-e-vč-ijg xar-san uu?

私.GEN 耳-EP-DS-ACC 見る-VN.PAST QP

「私のイヤフォンを見かけた？」

(15) Šar xavtas-taj-g-aas=n⁷ neg-ijg av-ʔja.

黄色 表紙-PROP-EP-ABL=3RD.POSS 1-ACC 取る-TV.VOL

⁷ 例 (15) では、派生接辞 *-TAJ* に奪格接辞が付く際に子音 *g* が挿入されている。これは、二重母音や長母音で終わる形態素に、長母音で始まる形態素が付く場合に規則的に起こる。

「その黄色の表紙の（本・ノート）を一冊買います」（直訳：その黄色の表紙持ちから一つを買います）

2.4 -TAJによる派生語を用いた所有・存在表現と、存在動詞を用いた所有・存在表現

モンゴル語では、派生接辞 *-TAJ* による派生語を用いた所有・存在表現（例 (44) の最初の文を参照）の他に、存在動詞 *baj-* などを用いた所有・存在表現も可能である（例 (16)）。

- (16) Čamd arvan mjangan tögrög baj-na uu?
君.DAT 10 1000 トウグルグ.NOM ある-TV.NP QP
「君、一万トウグルグ（通貨単位）持っている？」

これらの二つの表現の違いについては、本稿では扱わないが、先行研究には、情報構造などの点から論じた風間 (1999) や、存在物・被所有物の意味的な特徴（存在物・被所有物が物、人、属性のどれであるか）や、文構造の面から記述を試みた橋本 (2010) などがある。

2.5 欠如を表す形式

派生接辞 *-TAJ* とは逆に、あるものが欠如していることを表す接辞⁸ *-güj* がある。*-güj* については考察が進んでいないことから、本稿では例を挙げるに止める。

- (17) xariuclaga-güj xün
責任-ABES 人
「無責任な人」
- (18) Bi margaaš zav-güj.
私.NOM 明日 暇-ABES
「私は明日忙しい」（直訳：私は明日暇なしだ）

2.6 共格接辞 -TAJ

派生接辞 *-TAJ* は、共格接辞 *-TAJ* と形が同じである。共格接辞 *-TAJ* も派生接辞 *-TAJ* 同様、母音調和による異形態 *-taj*, *-toj*, *-tej* を持つ。なお、モンゴル語学では「共格」ではなく、「共同格」という用語が慣習的に用いられる。しかし、本特集での用語にそろえて「共格」と呼ぶ。共格接辞 *-TAJ* が現れる例は次の (19) を参照。

- (19) Bi aav-taj ir-sen.
私.NOM 父-TAJ 来る-VN.PAST
「私は父さんと来た」

⁸ 本稿では暫定的に *-güj* を「接辞」としたが、*-güj* は母音調和に従わない点で、モンゴル語の他の接辞とは異なる。*-güj* を接辞として見なすべきか、それとも別のもの（例えばクリティック）として見なすべきかは、今後検討を要する課題である。

先行研究には, Bosson (1964: 53-54), Binnick (1979: 27), 風間 (1999: 96-102), Bittigau (2003: 61-62) のように, 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別せずに, 両者をまとめて共格接辞として扱っているものがある⁹. その一方で, Luvsanvandan (1968: 179-182), Kullmann and Tserenpil (1996: 98), Önorbajan (2004: 214-215) のように, 派生接辞 *-TAJ* を共格接辞 *-TAJ* から区別すべきであることを主張するものもある¹⁰. 本稿では, 両者の異同について4節で詳しく議論するまでは, とりあえず両者を異なるものとして扱うことにする.

3. 派生接辞 *-TAJ* が有する屈折接辞的な特徴

2.3 節では, 派生接辞 *-TAJ* が (他の派生接辞と共通して) 持つ派生接辞的な特徴を挙げた. しかし, 派生接辞 *-TAJ* は屈折接辞的な特徴も有している. 以下, そうした屈折接辞的な特徴を観察する.

3.1 派生接辞 *-TAJ* が付く単位

2.3 節で述べたように, *-TAJ* は語 (語基) に付きうる. しかしそれに加えて, 風間 (1999: 97) に指摘があるように, *-TAJ* が付く名詞が「修飾語をとることも多く, その際意味的にはまず語境界を越えて修飾語と N2 が一つのまとまりをなし, これに *-TAJ* の意味が加わる」場合がある (なお, 引用文中の「N2」とは *-TAJ* が付加される名詞語基のことである. また, 風間 (1999) の原文では, *-TAJ* の異形態に *-taj*, *-toj*, *-tej* があることを示すために, モンゴル語学で慣習的に用いられている「*-taj*³」という表記が用いられているが, 本稿の表記に合わせて *-TAJ* とした). 例としては, (1) において, *xüüxed-tej* 「子持ちの」の *xüüxed* 「子供」が *olon* 「多くの」によって修飾されている例, (2) において *širxeg-tej* 「個入りの」の *širxeg* 「個」が *arvan* 「10」によって修飾されている例, 同じく (2) において *üne-tej* 「値段持ちの」の *üne* 「値段」が *jamar* 「どんな」によって修飾されている例などを参照.

この場合, *-TAJ* は (形態論的単位である) 語基ではなく (統語的単位である) 句に付加されていると見ることが出来る. このような, 句に対する *-TAJ* の付加は, 語基 (より正確に表現すれば「句」基といふべきか) と *-TAJ* の組み合わせが意味的におかしくない限り, 基本的にどのような組み合わせも可能である.

句に付きうる派生接辞は, *-TAJ* 以外にはほとんどなく¹¹, その点で, 派生接辞 *-TAJ* は,

⁹ これら先行研究の目的は, 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の異同を議論すること「以外に」ある. 従って, これらの先行研究は, 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を便宜的に同じものとして扱っているに過ぎないと思われる (これらの研究は, 派生接辞 *-TAJ* を共格接辞 *-TAJ* から区別すべきであることを主張する先行研究を検討・批判する手続きを踏んだ上で両者を積極的に同一視しているわけではない).

¹⁰ Önorbajan (2004: 214) には, 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* が, 歴史的には起源を同じくすることが述べられている.

¹¹ *-TAJ* 以外にも, 句に付きうる派生接辞が若干数存在する. そのような接辞には, 例えば, 2.5 節で挙げた「欠如」を表す *-güj* がある.

jamar=č	nemer-güj	nöxör
どんな=FP	追加-ABES	友

「何の足しにもならない奴」(直訳: どんなも追加なしの友. č は「～も」という意味を表

他の多くの派生接辞とは性質を異にしている。そして、句に付きうるという点に着目すると、派生接辞 *-TAJ* は屈折接辞と同じ特徴を持っていると言える。屈折接辞である格接辞が（少なくとも意味の観点からは）句に付いている例は、次の例 (20) を参照。(20) では、対格接辞 *-ijg* が *ene üzeg* 「このペン」という句に付いている。

- (20) **Ene üzg-ijg xaana-as av-san be?**
 この ペン-ACC どこ-ABL 取る-VN.PAST QP
 「このペンはどこで買ったの?」

3.2 複数接辞への派生接辞 *-TAJ* の付加

派生接辞 *-TAJ* は複数接辞の後にも付きうる (例 (21) ~ (23)). なお、派生接辞 *-TAJ* が複数接辞の「前」にも現れることについては、(11) ~ (13) を、*-TAJ* 「以外」の派生接辞が複数接辞の「前」に現れることについては (10) を参照)。

これは、他の派生接辞とは異なる特徴で、むしろ屈折接辞である格接辞と共通する特徴である (格接辞の一つである対格接辞が複数接辞の後に付いた例は (24) を参照)。

- (21) **xöörxön xee ugalzn-uud-taj gutal**
 かわいい 柄 模様-PL-PROP 靴
 「かわいい (複数の) 柄の付いた靴」
- (22) **Camc=n' xar tolbon-uud-taj baj-san.**
 シャツ.NOM=3RD.POSS 黒い しみ-PL-PROP ある-VN.PAST
 「そのシャツは黒い (複数の) しみが付いていた」
- (23) **Naad tom tovčn-uud-taj=čín' ix xöörxön jum aa.**
 この 大きい ボタン-PL-PROP=2ND.POSS とても かわいい MP MP
 「その大きい (複数の) ボタンの付いているのはとてもかわいいね」(聞き手のコートを褒めている)
- (24) **Ene nomn-uud-yg unši-ž üz-eerej.**
 この 本-PL-ACC 読む-CV.IMPF 見る-TV.OPT
 「これらの本を読んでごらん下さい」

3.1 節で指摘した「派生接辞 *-TAJ* が句に付きうること」および3.2 節で見た「派生接辞 *-TAJ*

す)

なお、2.6 節で述べたように、風間 (1999) は派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別せずに、同一のものとして扱っている。風間 (1999:97) では、(本稿で「派生接辞」と呼んでいる) *-TAJ* が「句」に付加可能であることは、*-TAJ* が格接辞であることを考えれば、特に問題になるような現象ではない旨を述べている。

が複数接辞の後に現れること」以外にも、派生接辞 *-TAJ* が屈折接辞的であることを示す現象が存在する。その現象は、次節で論じる「派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の異同」にも関係するので、ここでは扱わずに 4.3 節で論じることにする。

4. 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の異同

2.6 節で述べたように、派生接辞 *-TAJ* は共格接辞と同形である。先行研究の中には、Luvsanvandan (1968: 179-182), Kullmann and Tserenpil (1996: 98), Önörbajan (2004: 214-215) のように、両者を混同すべきではないことを明記しているものがある。こうした先行研究によれば、共格接辞 *-TAJ* を伴う語が専ら述語修飾で用いられるのに対して、派生接辞 *-TAJ* による派生語は主に連体修飾で、時として述語修飾で用いられる¹² (Luvsanvandan 1968: 181, Kullmann and Tserenpil 1996: 98, Önörbajan 2004: 214)。

本節では、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する基準としてこれらの先行研究で提案されているものの妥当性を検討する。まず、連体修飾語中の *-TAJ* を派生接辞 *-TAJ* として認めるこれら先行研究の主張の妥当性を確認する (4.2 節)。その後、述語修飾語中に現れている *-TAJ* について考察し、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* のどちらであるかを判断できない場合があることを指摘する。

4.1 再帰所属接辞・人称所属小辞の付加

4.1.1 再帰所属接辞の概略

派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を異なる形態素として認める先行研究では、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の間で、再帰所属接辞もしくは人称所属小辞の付加可能性に違いがあることが指摘されている。そこでまず、再帰所属接辞と人称所属小辞のうち、前者に関する現象を説明しておく (4.1.2 節および 4.1.3 節で展開する再帰所属接辞に関する議論は、人称所属小辞についても当てはまる。しかし、議論を簡略化するために、再帰所属接辞に関するデータのみを扱う。また、「再帰所属接辞」と「人称所属小辞」をそれぞれ簡潔に、「再帰接辞」、「人称小辞」と呼ぶことにする)。再帰接辞 *-AA* (母音調和により *-aa/-oo/-ee/-öö* の異形態がある) は、「斜格 (主格以外の格) 形の名詞に付いて、それが、文の主語に所属することを表わし、多くの場合、「自分の～」と訳しうる」ものである (栗林 1992: 507。引用文中の () 内の但し書きは、原文のまま)。

この説明にあるように、格接辞の付加先である語幹の指示対象が、主語名詞句の指示対象に属するものである場合には、格接辞の後に再帰接辞を付けることができる。この基準を用いれば、例 (25) に現れている *-TAJ* は共格接辞であると言える。

¹² 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する先行研究の中で、派生接辞 *-TAJ* による派生語に、述語としての用法 (例 (2)) があることについて明確に言及しているものはない。ただし、Kullmann and Tserenpil (1996: 98) が挙げている、派生接辞 *-TAJ* の例の中には、この用法で用いられているものを確認できる。

- (25) Bi aav-taj-g-aa¹³ ir-sen.
私.NOM 兄-TAJ-EP-REFL 来る-VN.PAST
「私は（自分の）父と来た」

2.2 節で述べたように、派生接辞 *-TAJ* による派生語は、述語修飾の他、連体修飾する場合もある。この後の 4.1.2 節の議論では、派生接辞 *-TAJ* を、名詞を名詞と関係付ける際に用いられる格接辞である属格接辞とも比較することになるので、属格接辞の（直後に再帰接辞が付いた）例を下の (26) に挙げる。

- (26) Bi aav-yn-xaa¹⁴ mašin-aar ir-sen.
私 父-GEN-REFL 車-INS 来る-VN.PAST
「私は（自分の）父の車で来た」

ここで、属格接辞の後に再帰接辞が付く場合について、さらに詳しく説明しておく。

öglöön-ij caj (朝-GEN 茶)「朝食」という句 (イディオム) は、属格名詞が直後の名詞を修飾している構造をとっている (この構造を N1-GEN N2 と表記する)。この *öglöön-ij caj*「朝食」という句を「昨日、自分の朝食に (直訳では「自分の朝のお茶に) 何を食べましたか?」という文で用いる場合を例にとりて説明する。「自分」の物であるのは N1 の *öglöö*「朝」ではなく、主要部である N2 の *caj*「茶」であるので、意味的な観点からは、N2 の *caj*「茶」に再帰接辞が付くことが予想される。この予想のように、再帰接辞が N2 に付く例は適格となる。(27a) を参照。しかしこれとは別に、N1 (に付いた属格接辞) に再帰接辞が付く例 (再帰接辞の付加先が意味と合致していない例) も許容される。(27b) を参照 (なお、(27a) と (27b) の意味的、語用論的な違いは不明である)。

- (27a) Öčigdör öglöön-ij cajn-d-aa¹⁵ juu id-sen be?
昨日 朝-GEN 茶-DAT-REFL 何.NOM¹⁶ 食べる-VN.PAST QP
「昨日、朝食に何を食べましたか?」

- (27b) Öčigdör öglöön-ij-xöö cajn-d juu id-sen be?
昨日 朝-GEN-REFL 茶-DAT 何.NOM 食べる-VN.PAST QP
「昨日、朝食に何を食べましたか?」

¹³ 例 (25), (26) では共格接辞や属格接辞の後に再帰接辞が現れているが、再帰接辞が現れない文も適格である。例 (25) から再帰接辞をとった文は、(19) を参照。例 (19) は、聞き手と話し手が同一家族の成員である場合に用いられる。それに対して、(25) は、聞き手が話し手とは異なる家族の成員である場合に用いられる。

¹⁴ 属格接辞に付く再帰接辞は、*-aal-ool-ee/-öö* ではなく、*-xaa/-xool/-xeel/-xöö* となる (x が現れる)。

¹⁵ *caj*「茶」に与位格接辞 *-d* が付く際には、語幹末に n が現れる。

¹⁶ 大まかに言って、直接目的語名詞句の表すものの定性が低い場合には、当該の名詞句は (対格ではなく) 主格で現れる。

4.1.2 連体修飾語中の *-TAJ*

再帰接辞（や人称小辞）の付加可能性を判断基準として、派生接辞 *-TAJ* が共格接辞 *-TAJ* とは異なることを主張する先行研究は、派生接辞 *-TAJ* の後に再帰接辞（や人称小辞）が付かない事実を簡潔に述べているか、あるいは、不適格である例を一つ示しているだけである（前者のタイプとしては、Luvsanvandan (1966: 180-181) や Önörbajan (2004: 215) が挙げられる。後者の研究としては、Kullmann and Tserenpil (1996: 98) が挙げられる。Kullmann and Tserenpil (1996) が挙げている不適格な例は、**ceceg-tej-g-ee daavuu*（花-PROP-EP-REFL 布）である）。

これらの先行研究での議論は、前提となっている現象の説明を省略しているため、理解されにくい恐れがある。そこで以下では、(27b) に挙げた N1-GEN N2 中の N1 の属格接辞の後に再帰接辞が付く現象を、内部に *-TAJ* を含む連体修飾語の場合と比較することで、先行研究の主張内容を補足説明する（内部に *-TAJ* を含む述語修飾語については、すぐ後の 4.1.3 節で考察する）。

- (28a) **Nogoo-toj šölön-d-öö** ene xool amlagč-ijg
 野菜-PROP スープ-DAT-REFL この 料理 調味料-ACC
 xij-vel ilüü amt-taj bol-no.
 入れる-CV.CON より 味-PROP なる-TV.NP
 「野菜スープにこの調味料を入れると、もっとおいしくなる」

- (28b) ***Nogoo-toj-g-oo šölön-d** ene xool amlagč-ijg
 野菜-PROP-EP-REFL スープ-DAT この 料理 調味料-ACC
 xij-vel ilüü amt-taj bol-no.
 入れる-CV.CON より 味-PROP なる-TV.NP
 （野菜スープにこの調味料を入れると、もっとおいしくなる）

上の例 (28a) において、主語名詞句が表す人（この場合は文中に現れていない）にとって「自分の」ものであるのは、N1-PROP N2 の N2 (*šöl* 「スープ」) であると考えられる。従って、N2 の後に再帰接辞が付加されている例 (28a)（再帰接辞の付加先が意味と合致する例）は適格となる。さらに、もし例 (28a) 中の *nogoo-toj* 「野菜入りの」における *-toj* が格接辞（格接辞の中でも、音形から考えて特に共格接辞）なのであれば、属格接辞を含んでいる N1-GEN N2 の場合（例 (27b) の場合）と同じように（たとえ意味的に N1 の *nogoo* 「野菜」が主語名詞句の指示対象に関係するものでなくても）、*-toj* の後に再帰接辞が付くことができるかと予想される。しかし、(28b) に示したように、*-toj* の直後に再帰接辞が付いた例は許容されない。従って、(28a) における *-toj* は（共）格接辞ではなく、別の種類の接辞（この場合は派生接辞）と見なせることになる。

再帰接辞（や人称小辞）の付加可能性の違いから、派生接辞 *-TAJ* を共格接辞 *-TAJ* とは異なるものであるとする先行研究の指摘は、内部に *-TAJ* を含む連体修飾語に関するデータを観察する限り、妥当なものであると考えられる。

4.1.3 述語修飾語中の -TAJ

4.1.2 節で見たように（そして、派生接辞 -TAJ を共格接辞 -TAJ から区別することを主張する先行研究で指摘されているように）、内部に -TAJ を含む連体修飾語に関するデータを観察する限りでは、派生接辞 -TAJ と共格接辞 -TAJ を異なる形態素として認定する形態論的根拠が存在する。

ところで、再帰接辞（や人称小辞）の付加可能性を基準にして派生接辞 -TAJ を共格接辞 -TAJ から区別することを主張する先行研究は、派生接辞 -TAJ による派生語が述語修飾する場合については、再帰接辞の付加可能性に関して明確に述べていない。

さらに、問題を複雑にしていることとして、派生接辞 -TAJ を共格接辞 -TAJ から区別することを主張する先行研究が、具体的にどのような例を「派生接辞 -TAJ による派生語が述語修飾する例」として見なしているのかがはっきりしないことが挙げられる。これらの先行研究が「派生接辞 -TAJ による派生語が述語修飾する例」として具体的に挙げているものは、(3) に挙げた *zorig* 「勇気」→*zorig-toj* 「勇敢に」(Luvsanvandan 1968: 181) の他、*ur* 「技術」→*ur-taj* 「巧みに」(Luvsanvandan 1968: 181), *amžilt* 「成功」→*amžilt-taj* 「成功裏に」(Önörbajan 2004: 214) など、属性・抽象的な事象を表す語から派生したものに限定されている。

こうした先行研究に挙げられている語以外にも、「派生接辞 -TAJ による派生語が述語修飾する例」として見なしうるものは存在する。例えば *cünx-tej* 「鞆持ちの」という、内部に -TAJ が現れている語がある。この語は、「属性」を有していることよりはむしろ、「現に所持している」ことを表していると考えられる（「現に所持している」という用語については、本特集の「導入と総括」の 2.1 節を参照）。この語は、例えば *cünx-tej xün* 「鞆持ちの人」のように、連体修飾語として用いることができる。この「鞆持ちの人」という表現に現れている -TAJ の後には、再帰接辞が付かない (4.1.2 節)。このことから、この表現中の -TAJ は派生接辞であると言える。ところで、この *cünx-tej* という語は、述語修飾をすることもできる。

- (29) Či **cünx-tej** ir-sen üü?
君.NOM 鞆-TAJ 来る-VN.PAST QP
「鞆持参で来た？」

「鞆持ちの人」に見られる *cünx-tej* と (29) に見られる *cünx-tej* は、(文中で果たす機能は違うものの) 意味の観点からはかなり近い。しかし、(29) に現れる *cünx-tej* のように「現に所持」することを表す語が述語修飾で用いられている場合、それを派生接辞 -TAJ による派生語と見なすのか、それとも共格名詞として見なすのかについて、先行研究では言及がない。すなわち、(29) の *cünx-tej* のような語を、派生接辞 -TAJ による派生語として見なしていないためにこうした語への再帰接辞の付加可能性について（意図的に）言及していないのか、あるいは単に考察の対象から漏れていたために言及していないのかが明らかではない。

少なくとも意味的な観点から派生接辞 -TAJ による派生語として見なしうる余地のある、(29) の *cünx-tej* のような語に関して、筆者のデータを観察すると、(30) や (31) に示したよ

うに、再帰接辞を付加することができる¹⁷。

- (30) Či cünx-tej-g-ee ir-sen üü?
君.NOM 鞆-TAJ-EP-REFL 来る-VN.PAST QP
「鞆持参で来た？」

- (31) [Gutal-taj / Gutal-taj-g-aa] or-ž bolo-x-güj.
鞆-TAJ 鞆-TAJ-EP-REFL 入る-CV.IMPF ～してよい-VN.NP-ABES/NEG
「鞆を履いたまま入ってはいけない」

このように、内部に *-TAJ* を含む語が述語修飾している場合、意味の観点からは当該の語を派生接辞 *-TAJ* による派生語と見なしうるが、再帰接辞の付加可能性という観点からは、共格名詞として見なせる例が存在する。このように、述語修飾語中の *-TAJ* が、派生接辞 *-TAJ* なのか、それとも共格接辞 *-TAJ* なのかを、再帰接辞（や人称小辞）の付加可能性という観点からは判断できない例が存在する¹⁸。

¹⁷ *zorig-toj* 「勇敢に」、*ur-taj* 「巧みに」、*amžilt-taj* 「成功裏に」などの語（すなわち、派生接辞 *-TAJ* を共格接辞 *-TAJ* から区別する先行研究が、述語修飾の例として挙げているもの）に、再帰接辞が付きうるかどうかについては、筆者は未確認である。

内部に *-TAJ* を含む述語修飾語のうち、あるものに対しては (30), (31) のように再帰接辞を付加することができるが、別のもの（例えば *zorig-toj* 「勇敢に」）に対しては再帰接辞を付加することができない現象がもし観察されれば、同じ「内部に *-TAJ* を含む述語修飾語」であっても、区別する必要がでてくる。今後、内部に *-TAJ* を含む述語修飾語に再帰接辞を付加することができるかどうかについて、多くのデータを収集し観察する必要がある。

そしてもし、内部に *-TAJ* を含む述語修飾語を再帰接辞の付加可能性から2種類に分けることができる場合には、その違いが「派生接辞と共格接辞の区別」に関するものなのか、それとも別の事象（例えば、4.3節で扱う「語の形態的緊密性」）に関するものなのかについて、検討する必要がある。

¹⁸ 4.1.1節で述べたように、再帰接辞は主格以外の格接辞に付く。議論を簡略化するために4.1.1節では述べなかったが、再帰接辞は、格接辞の他にも、動詞の副動詞語尾（動詞語幹に付いて非言い切り形を作る接辞）、後置詞、副詞の直後に付きうる。

ここで問題になるのは、副詞の直後に再帰接辞が付きうることである。例えば、名詞 *ödör* 「日」から派生した *ödör-žin* 「一日中」という副詞がある。この *ödör-žin* には再帰接辞を付けることが可能である：*ödör-žing-öö* 「一日中」（接辞 *-žin* は後に再帰接辞が付く際には末尾に *g* が現れる）。

（名詞から副詞を形成する派生接辞は、現段階ではこの *-žin* だけしか見つかっていないので、まだ詳しい考察はできていないが）仮に、名詞から派生した副詞は再帰接辞をとることが「一般に」できるのであれば、「名詞から派生した副詞」も「共格名詞」も、どちらも再帰接辞をとれる点では、違いがないことになる。その場合、例えば (29) の *cünx-tej* 「鞆持ちで」は、「名詞から派生した（述語修飾で用いられる）副詞」であるにせよ、「共格名詞」であるにせよ、(30) のように再帰接辞をとれることになる。すなわち、(29) の *cünx-tej* が派生接辞 *-TAJ* による派生語なのか、それとも共格名詞なのかを、再帰接辞の付加可能性という観点からはそもそも判断できないことになる。この問題については今後さらに考察を深めたい。

4.2 後置詞 *xamt*, *cug* との共起可能性

Kullmann and Tserenpil (1996: 98) は、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する方法として、*xamt* 「一緒に」や *cug* 「一緒に」といった特定の語を、内部に *-TAJ* を含む語の後に置くことを挙げている¹⁹。Kullmann and Tserenpil (1996) は、共格名詞が後置詞 *xamt* と共起できる例として (32) を、派生接辞 *-TAJ* による派生語が後置詞 *xamt* と共起できない例として (33) を挙げている（ラテン文字転写、形態分析、例文中の強調、グロス及び訳文は筆者による）。

- (32) ax-taj **xamt** java-
兄-TAJ 一緒に 行く
「兄と一緒に行く」（動詞は語幹のまま）（Kullmann and Tserenpil 1996: 98）

- (33) *malgaj-taj **xamt** xün
帽子-PROP 一緒に 人 （Kullmann and Tserenpil 1996: 98）

上の例から、連体修飾で用いられている「派生接辞 *-TAJ* による派生語」を、共格名詞から区別することが可能なことが分かる（そしてこの分析結果は、4.1 節で得られた、「連体修飾で用いられている「派生接辞 *-TAJ* による派生語」を、共格名詞から区別することが可能である」という結論と同じものである）。

ところで、Kullmann and Tserenpil (1996) には、述語修飾語中の *-TAJ* が派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* のどちらであるのかを判断することが、*xamt* などの特定の語との共起可能性を見ることで可能であるかどうかについて言及していない。

そこで、内部に *-TAJ* を含む述語修飾語の例を観察すると、(34) のように（例えば）*xamt* と共起できるものと、(35) のように共起できないものの両方が存在する。

- (34) Bi **aav-taj** **xamt** ir-sen
私.NOM 父-TAJ 一緒に 来る-VN.PAST
「私は父と一緒に来た」

¹⁹ 類似した指摘は Önörbajan (2004: 214) にも見られる（Önörbajan (2004) は共格名詞が *xamt*, *cug* 以外にも *adil* 「同じ」、*ižil* 「同じ」、*töstej* 「似ている」という語とも結びつくことを指摘している）。ただし、Önörbajan (2004) の指摘は、本文で挙げた Kullmann and Tserenpil (1996) のものとは若干異なっていると考えられる。

Kullmann and Tserenpil (1996) は、“You can usually add the **postpositions** ‘*cug*’ or ‘*xamt*’ to a CS [case suffix]”（強調は原文のまま、原文では *cug*, *xamt* はキリル文字による表記、[] 内は筆者による補足）と述べており、内部に *-TAJ* を含む語の直後に *cug* や *xamt* を「置くことが可能かどうか」を基準として、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別しようとしている。

一方、Önörbajan (2004: 214) は「共格形の語は *xamt*, *cug*, *adil*, *ižil*, *töstej* といった語と結びつくことが多い」（筆者訳）と述べている。これは、事実を記述しているだけであると考えられる。その点で、（実際には *xamt* や *cug* が現れていない文に）*xamt* や *cug* を「入れることが可能であるかどうか」を見る Kullmann and Tserenpil (1996) の指摘とは、異なっていると考えられる。

- (35) *Bi cūnx-tej xamt ir-sen.
私.NOM 鞆-TAJ 一緒に 来る-VN.PAST
(私は鞆持参で来た)

例 (34), (35) に関する限りでは ((32), (33) と並行的にとらえて), (34) 中の *-TAJ* を共格接辞 *-TAJ* と見なし, (35) 中の *-TAJ* を派生接辞 *-TAJ* として見なすことが可能であるように思われる。

しかし, この分析には, 次のような問題点がある: 確かに, *xamt* や *cug* などの特定の語との共起関係を見ることで, 内部に *-TAJ* を含む述語修飾語を, 「後置詞 *xamt* や *cug* を直後に置けるもの」(例 (34)) と 「後置詞 *xamt* や *cug* を直後に置けないもの」(例 (35)) のどちらかに分類することが可能である。しかし, *xamt* や *cug* との共起可能性を見るこの方法が, 当該の *-TAJ* が派生接辞と共格接辞のどちらであるのかを判断する基準として有効であるのかは, 別途検討の余地がある。そして筆者は, この方法が派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する基準として機能しうることについて, 十分に確信を得ていない。

理由は次の通りである: 例えば (35) において, *cūnx-tej* の後に *xamt* が現れることができないのは, 「*cūnx-tej* 中の *-TAJ* が派生接辞であること」という (派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の異同に関する) ことに起因するのではなく, 別の要因 (例えば *-TAJ* の語基や後置詞 *xamt* の意味に関係する要因) が存在する可能性も否定できない。

また仮に, ある特定の述語修飾語中の *-TAJ* が, 派生接辞であるのか, それとも共格接辞であるのかを判断する方法として, *xamt* や *cug* などの語との共起可能性を用いることに十分な根拠があることが分かったとしても²⁰, この方法を用いることができるのは, 述語修飾語の一部に対してであるに過ぎない。次の例 (36a) 中の *Dulmaa-taj* 「ドルマーと」は, 共格名詞として先行研究で扱われるものである²¹。もし, 後置詞 *xamt* や *cug* との共起可能性を, 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する判断基準として, いかなる場合にも使えるのであれば, 例 (36a) の *Dulmaa-taj* の後に (意味をほとんど変えることなく) 後置詞 *xamt* や *cug* を入れることができるはずである。しかし, 実際には *Dulmaa-taj* の後に *xamt* や *cug* を (意味をほとんど変えることなく) 入れることはできない。(36b) は非文ではないが, (36a) の意味は表さず, 「私はドルマーに付き添ってもらって, (文中には明示されていない) ある人と会った」という意味を表す。

²⁰ 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する方法として, 後置詞 *xamt* や *cug* との共起可能性を見ることが妥当であるとすれば, 例えば次のようなものが根拠 (の一つ) として考えられる: 一部の後置詞は, 直前に現れる名詞の「格を支配する」(が, 特定の派生接辞の出現を要求する後置詞はない)。従って, 後置詞である *xamt* や *cug* の直前の名詞中の *-TAJ* は格接辞である, とするものである。この考え方はそれなりに妥当なものであると考えられるが, さらに詳しく検討する必要がある。

²¹ Luvsanvandan (1968: 181) と Kullmann and Tserenpil (1996: 98) が, 共格名詞が現れている例として挙げている文の中には, (36) 中の動詞 *uulz-*「会う」が現れているものが含まれている。そして, *uulz-* の直前に現れている *bagš-taj*「先生と」という語を, 共格名詞として分析している。したがって, 例 (36a) の *Dulmaa-taj*「ドルマーと」を「共格名詞として先行研究で扱われているもの」と見なして差支えないと思われる。

(36a) Bi Dulmaa-taj uulz-san.
私.NOM PN-TAJ 会う-VN.PAST
「私はドルマーと会った」

(36b) Bi Dulmaa-taj xamt uulz-san.
私.NOM PN-TAJ 一緒に 会う-VN.PAST
「私はドルマーと一緒に（ある人と）会った」

(36b) 中の *Dulmaa-taj* が *xamt* の直前に現れることをもって、(36b) 中の *Dulmaa-taj* を共格名詞と見なすことは可能かもしれないが、そこから直ちに (36a) の *Dulmaa-taj* も共格名詞であるということにはならない。このように、後置詞 *xamt* や *cug* との共起可能性を見る方法は（派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する方法として有効であると分かったとしても）、常に適用可能であるとは限らない。

4.3 並置された複数個の名詞に対する派生接辞 *-TAJ* の付加

Önörbajan (2004: 215) は、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* との違いを述べる文脈の中で、並置された複数個の名詞の最後にのみ、共格接辞 *-TAJ* が付くことを述べている（なお、このことは、共格接辞以外の格接辞についても当てはまる）。例 (37a) を参照。並置された複数個の名詞それぞれに共格接辞が付く例 (37b) は、通常は許容度が低い²²。

(37a) Bi Boldoo, Bajaraa, Dulmaa gurav-taj²³ jav-san.
私.NOM PN PN PN 3-TAJ 行く-VN.PAST
「私はボルドー、バヤラー、ドルマーの3人と行った」

(37b) ?Bi Boldoo-toj, Bajaraa-taj, Dulmaa-taj jav-san.
私.NOM PN-TAJ PN-TAJ PN-TAJ 行く-VN.PAST
（私はボルドーと、バヤラーと、ドルマーと行った）

Önörbajan の論の流れを考えると、彼は、この特徴が派生接辞 *-TAJ* については当てはまらないことを主張しようとしている可能性がある²⁴。

²² 誰と行ったのかを一人一人思い出しながら、ゆっくりと発話する場合には許容される。

²³ 例 (37a) では、並置された複数個の名詞の後に *gurav* 「3」が置かれている。モンゴル語ではこのように、複数個の名詞を並置する場合には、並置された名詞が表す人・物の数を表す数詞を最後に置くことがしばしばある。(37a) において、並置された複数個の名詞の後に *gurav* 「3」を置くことなく、最後の名詞 *Dulmaa* に *-TAJ* を直接付けることも、くだけた会話では可能である。

²⁴ Önörbajan (2004) は、並置された複数個の名詞の最後に共格接辞が付くことを、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の異同を議論している段落の中で指摘している。このことから、共格接辞が付加される位置に関する Önörbajan (2004) のこの指摘は、共格接辞 *-TAJ* を派生接辞 *-TAJ* から区別する方法として提示されたものであると考えられる。しかしその一方で Önörbajan (2004)

言語事実を観察すると、派生接辞 *-TAJ* (例 (39) では、派生接辞 *-TAJ* の可能性がある接辞) が、並置された複数個の名詞の最後にのみ付くのではなく、それぞれの名詞に付く例を確認することができる。

- (38a) Dorž maš **uxaan-taj**, **av'jaas-taj** xün bajna.
 PN.NOM とても 知恵-PROP 能力-PROP 人.NOM MP
 「ドルジはとてもかしこくて能力のある人だなあ」
- (38b) *Dorž maš **uxaan**, **av'jaas-taj** xün bajna.
 PN.NOM とても 知恵 能力-PROP 人.NOM MP
 (ドルジはとてもかしこくて能力のある人だなあ)
- (39a) Jum бүхэн-d **xariuclaga-taj**, **idevx-tej** xand-a-x jos-toj.
 物 全て-DAT 責任-TAJ 積極性-TAJ 向かう-EP-VN.NP 道理-PROP
 「何事にも責任を持って、積極的に取り組むべきである」
- (39b) *Jum бүхэн-d **xariuclaga**, **idevx-tej** xand-a-x jos-toj.
 物 全て-DAT 責任 積極性-TAJ 向かう-EP-VN.NP 道理-PROP
 (何事にも責任と積極性を持って取り組むべきである)

しかしその一方で、(40b), (41b) のように、派生接辞 *-TAJ* が (共格接辞の場合と同様に) 並置された複数個の名詞の最後に付く例も存在する ((40a), (41a) のように、並置された複数個の名詞それぞれに *-TAJ* を付ける例は、許容度が低いと判断する話者もいる)。

- (40a) Ter xün **malgaj-taj**, **beelij-tej** xün baj-san.
 その 人.NOM 帽子-PROP 手袋-PROP 人.NOM ある-VN.PAST
 「その人は帽子を被って手袋をした人だった」
- (40b) Ter xün **malgaj**, **beelij-tej** xün baj-san.
 その 人.NOM 帽子 手袋-PROP 人.NOM ある-VN.PAST
 「その人は帽子と手袋をした人だった」

は、「派生」接辞 *-TAJ* が、並置された複数個の名詞に付く場合について、事実がどうであるかを述べていない。従って、共格接辞が付く位置に関する Önröbajan (2004) の指摘は、共格接辞 *-TAJ* を派生接辞 *-TAJ* と対比する意図でなされたものではなく、共格接辞 *-TAJ* の特徴を単に述べているだけである可能性もある (すなわち、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の異同を論じる段落とは別の段落でなされるべき記述が、何らかの理由で改行されることなく続けて書かれてしまった可能性も否定できない)。しかし仮にそうであっても、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* が、並置された複数個の名詞に付く際に、どのようなふるまいを見せるかを記述する必要があると考え、4.3 節で論じることにした。

(41a) **Malgaj-taj, beelij-tej gar-aaraj.**
 帽子-TAJ 手袋-TAJ 出る-TV.OPT
 「帽子を被って手袋をして外出しなさい」

(41b) **Malgaj, beelij-tej gar-aaraj.**
 帽子 手袋-TAJ 出る-TV.OPT
 「帽子と手袋をして外出しなさい」

(38) と (39) のように、並置された複数個の名詞それぞれに派生接辞 *-TAJ* が付くパターンだけが許容される例がある一方で、(40), (41) のように、並置された複数個の名詞の最後に派生接辞 *-TAJ* が付くことも許容される例がある現象は、次のことの反映であると考えられる：(38) と (39) 中の *uxaan-taj, xariuclaga-taj* という語においては、派生接辞 *-TAJ* の付加先である語基の自立度が低い（語基と *-TAJ* が緊密に結びついている）。それに対し、(40) および (41) の *malgaj-taj* の語基は、自立度がより高い（語基と *-TAJ* との結びつきが弱い）。すなわち、「語の形態的緊密性 (lexical integrity)」の違いを反映していると考えられる。

(37), (40), (41) のように、「共格接辞 *-TAJ*」および「派生接辞 *-TAJ* のうちの一部のもの」は、並置された複数個の名詞の最後に付く。それに対して、(38), (39) で見たように、「派生接辞 *-TAJ* のうち別の一部のもの」は並置された複数個の名詞それぞれに付く。このことから、「並置された複数個の名詞に付く際の位置」を手掛かりにすることで、派生接辞 *-TAJ* の一部（すなわち、派生接辞 *-TAJ* のうち、語基との結びつきが強いもの）を共格接辞 *-TAJ* から区別することはできるが、「派生接辞 *-TAJ* のうち、語基との結びつきが弱いもの」を共格接辞 *-TAJ* から区別することはできないと言える。

なお、「並置された複数個の名詞に付く際の位置」に関して、派生接辞 *-TAJ* の一部（語基との結びつきが弱いもの）と共格接辞が同じふるまいを示すこの現象は、3 節で扱った、派生接辞 *-TAJ* が示す屈折接辞的な特徴の一つとして加えることができる。

4.4 第4節のまとめ

4 節での議論²⁵をまとめると次の通りである。連体修飾語中の *-TAJ* は（共格接辞ではな

²⁵ 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* の違いとして、Luvsanvandan (1968: 181) では、派生接辞 *-TAJ* による派生語と共格名詞では、対応する疑問詞が異なることが指摘されている。彼の指摘によると、派生接辞 *-TAJ* による派生語は *jamar* 「どのような」や *jaaz* 「どのように」という疑問詞に対応するのに対して、共格名詞は *xen-tej* 「誰と」という疑問詞に対応する。例えば、下の (i) における *zorig-toj* 「勇敢な」は *jaaz* 「どうやって」という疑問詞に対応するが、(ii) における *Zorig-toj* 「ゾリクと」は *xen-tej* 「誰と」という疑問詞に対応する（例 (i), (ii) は Luvsanvandan (1968: 181) から引用。ラテン文字転写、形態分析、例文中の強調、グロス及び訳文は筆者による）。

(i) Bat **zorig-toj** barild-laa.
 PN.NOM 勇気-TAJ 相撲を取る-TV.PAST
 「バトは勇敢に相撲を取った」(Luvsanvandan 1968: 181)

(ii) Bat **Zorig-toj** barild-laa.
 PN.NOM PN-TAJ 相撲を取る-TV.PAST
 「バトはゾリク（人名）と相撲を取った」(Luvsanvandan 1968: 181)

く) 派生接辞であると言える。このことは、再帰接辞(及び人称小辞)の付加可能性から分かる。その一方で、述語修飾語中の *-TAJ* が派生接辞であるか、それとも共格接辞であるかを判断することは(少なくとも形式的には)難しくなる場合がある(4.1節)。

また、先行研究で派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する方法として提示されている「後置詞 *xamt* や *cug* との共起可能性」について次のことを論じた(4.2節): この方法は、連体修飾で用いられている「派生接辞 *-TAJ* による派生語」を、共格名詞から区別する方法としては有効である。しかし、述語修飾語中の *-TAJ* が、派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* のどちらであるかを判断する方法としては、有効性が明らかになっていない。そして、仮にこの方法の有効性が明らかになったとしても、この方法によって派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を常に区別できるわけではない。

さらに、「並置された複数個の名詞に付く際の位置」を手掛かりにして派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する方法については、次のことを主張した(4.3節): この方法により、派生接辞 *-TAJ* の一部(語基との結びつきが強いもの)を共格接辞から区別することが可能である。しかし、この方法を用いても「派生接辞 *-TAJ* のうち、語基との結びつきが弱いもの」を共格接辞から区別することはできない。

確かに Luvsanvandan (1968) のこの基準は、(i) と (ii) については適用可能である。

ところで、下の (iii) に現れている *ulaan cūnx-tej* 「赤い鞆持ちの」に対応する疑問詞は、(*jamar* でも *jaaz* でも *xen-tej* でもなく) (iv) に示したように *juu-taj* 「何持ちの」である。

(iii) Ter xūn ulaan cūnx-tej baj-san.
 その 人.NOM 赤い 鞆-PROP ある-VN.PAST
 「その人は赤い鞆を提げていた」(直訳: その人は赤い鞆持ちだった)

(iv) Ter xūn juu-taj baj-san be?
 その 人.NOM 何-PROP ある-VN.PAST QP
 「その人は何を持っていたのですか?」

(iii) の *ulaan cūnx-tej* 「赤い鞆持ちの」のような(対応する疑問詞が *juu-taj* 「何持ちの」である)語に現れる *-TAJ* が派生接辞なのか、それとも共格接辞なのかについては Luvsanvandan (1968) に言及がない。従って、彼が (iii) の *ulaan cūnx-tej* 「赤い鞆持ち」に現れている *-tej* を派生接辞と共格接辞のどちらと見なすのかは不明である。

共格名詞に対応する疑問詞が *xen-tej* であることを述べた Luvsanvandan (1968) の指摘のうち、彼が特に問題にしたかったことが、仮に「共格名詞に対応する疑問詞には *xen-tej* のように *-taj/-toj/-tej* という形式が含まれる」ということであれば、(iv) で用いられている疑問詞 *juu-taj* にも *-taj* が含まれていることから、(iii) の *-tej* は共格接辞であることになる(ただし、対応する疑問詞に *-TAJ* が含まれるかどうかを見るこの方法は、*-TAJ* が派生接辞と共格接辞のどちらであるかを判断しているのではなく、接辞 *-TAJ* と直前の語基との間の結合度の違いを判断している可能性がある。同様の議論は 4.3 節の「語の形態的緊密性」に関する箇所を参照)。一方、Luvsanvandan (1968) が問題にしたかったことが、「共格名詞に対応する疑問詞には *xen-tej* のように、*xen* 「誰」という形式が含まれる」ということであるならば、(iii) の *cūnx-tej* 「鞆持ちの」中の *-TAJ* は(共格接辞ではなく)派生接辞であることになる(仮に Luvsanvandan (1968) が問題にしたかったことがこのことであった場合には、共格接辞が(主に)人間を表す名詞に付くことを指摘していることになる)。なお、本脚注で述べたことは、本文で議論すべき問題であるが、Luvsanvandan (1968) の意図するところが明確ではないため、註で述べることとした。

5. 派生接辞 *-TAJ*による派生語の表す意味

本特集の「導入と総括」の2.1節及び3.1節で述べられているように、本特集で扱われている言語において、次のような一般的な傾向が見られる。

(42)

非普通所有物（誰にでもあるとは限らないもの）を表す名詞、あるいは、修飾語を伴う「普通所有物（誰にでもあるもの）を表す名詞」に「～持ち」を表す接辞が付く場合には、「単なる所有」を表す。一方、「～持ち」を表す接辞が、修飾語を伴わない「普通所有物を表す名詞」に付く場合には、当該の名詞の表すものが特別なものであること、あるいは、当該の名詞の表すものを豊富に有していることがしばしば含意される。

こうした傾向はモンゴル語においても観察される。例えば、非普通所有物である *saxal*「髭」から派生した *saxal-taj*「髭の生えた」は髭を「単に所有」することを表す。また修飾語を伴う普通所有物を表す名詞 *cenxer nüd*「青い目」に派生接辞 *-TAJ* が付いた *cenxer nüd-tej*「青い目をした」は、「青い目」を「単に所有」することを表す。その一方で、修飾語を伴わない普通所有物を表す名詞に派生接辞 *-TAJ* が付いた場合には、当該の名詞の表すものが特別なものであることが表されたり（例えば (6) に挙げた *tolgoj*「頭」→*tolgoj-toj*「かしこい」、例文は下の (43) を参照）、当該の名詞の表すものを豊富に有していることが表されたりする（(6) の *xüč*「力」→*xüč-tej*「力持ちの」）。

(43) Dorž bol **tolgoj-toj.**
PN.NOM FP 頭-PROP

「ドルジはかしこい」（直訳：ドルジは頭持ちだ）

このような傾向が存在することは確かであるが、派生接辞 *-TAJ* が、「修飾語を伴わない普通所有物を表す名詞」に付加された場合に、「単なる所有」を表しえない、というわけではない。

例えば、*tolgoj-toj* は文脈によっては（修飾語を伴わなくても）、「頭」を「単に所有」することを表す。下の (44) の *tolgoj-toj* は、「特別な頭を所有すること」を表しているのではなく、「脳」という思考をつかさどる臓器の入れ物としての「頭」を所有していることを表している。

(44) Xün бүр **tolgoj-toj.** Tijm učraas jum bolgon-yg
人 ～毎 頭-PROP そのような ～だから 物 ～毎-ACC
öör-ijn-xöö **tolgoj-g-oor** sajn dügne-x xereg-tej.
自分-GEN-REFL 頭-EP-INS 良い 判断する-VN.NP 必要-PROP

「人にはみな頭がある。だから何事も、自分の頭でよく判断しなければならぬ」

同様に, *nüü*「目」から派生した *nüü-tej* は, 修飾語を伴わない場合には, 通常, 「物事を判断する(特別な)眼力を有している」という意味で用いられる。

- (45) Dulmaa mal-d **nüü-tej.**
 PN.NOM 家畜-DAT 目-PROP
 「ドルマーには家畜を見分ける目がある」(直訳: ドルマーは家畜に対して目持ちだ)

しかし文脈によっては, 修飾語を伴わない *nüü-tej* は(特別な眼力を有することではなく)視覚器官である目を「単に所有」することも表しうる。

- (46) Dulmaa=č **nüü-tej.** Tijm učraas öör-ijn-xöö nüü-eer
 PN.NOM=FP 目-PROP そのような ~だから 自分-GEN-REFL 目-INS
 sajn muu-g=n' jalga-ž čad-na biz.
 良い 悪い-ACC=3RD.POSS 区別する-CV.IMPF できる-TV.NP MP
 「ドルマーにも目がある。だから自分の目でよし悪しを判断できるはずだ」

さらに例を挙げると, *xamar*「鼻」から派生した *xamar-taj*「鼻持ちの」は, 通常, 修飾語を伴って用いられ(*tom xamar-taj*「大きい鼻持ちの」), 単独では用いられない((47)を参照)。

- (47) ? Njalx xüüded **xamar-taj.**
 新生の 子供.NOM 鼻-PROP
 (赤ん坊には鼻がある)

しかし, (48) に示すように, 誰もが持っている「鼻」を有することが問題になる文脈では, (修飾語を伴わなくても) *xamar-taj* を用いることができる。

- (48) Njalx xüüded=č **xamar-taj.** Tijm učraas
 新生の 子供.NOM=FP 鼻-PROP そのような ~だから
 njalx xüüxed č gesen cecg-ijn sajxan üner-ijg
 新生の 子供.NOM ~でも 花-GEN 美しい におい-ACC
 meder-č čad-dag jum.
 感じる-CV.IMPF できる-VN.HAB MP
 「赤ん坊にも鼻がある。だから赤ん坊だって花の良い香りを感じる事ができるんだ」

角田 (2009: 163-165) では, 日本語, 英語, ワロコ^o 語などの所有表現において, 「普通所有物であって, しかも, 修飾要素がないのに, それでもなお, 所有の表現が出来る場合が二つある」(角田 2009: 163) ことが述べられている。そして, その「二つの場合」とし

て「(a) 特別な意味を持つ場合」((42) で述べた、「名詞の表すものが特別なものであること」や「名詞の表すものを豊富に有していること」などが表される場合) と「(b) 特別ではない意味を持つ場合」を挙げている。さらに、(b) が可能になるのは「適切な文脈がある場合に限」られることを指摘している (角田 2009: 163)。

普通所有物を表す名詞に *-TAJ* が付いて派生した語が、修飾語を伴わないにもかかわらず「単なる所有」を表している (44), (46), (48) の例は、角田 (2009) で指摘されている (b) の場合に該当すると考えられる。すなわち、「頭」、「目」、「鼻」のように、誰もが普通に有するもの (普通所有物) について所有を問題にすることはほとんどないので、普通所有物を表す名詞に *-TAJ* が付いて派生した語が、修飾語を伴わずに用いられる例は ((42) のような意味を表す場合を除けば) あまり観察されない。しかし、そうした、通常はわざわざ問題にしない普通所有物の「単なる所有」であっても、それをあえて表現することに意味がある文脈であれば、(44), (46), (48) のように用いられる。

修飾語を伴わない「普通所有物を表す名詞」に派生接辞 *-TAJ* が付いた語を、適切な文脈に置けば、「単なる所有」を表せるようになるこの現象は、派生接辞 *-TAJ* だけに関わるものではない。類似した現象は名詞述語文でも観察される。例えば、名詞 *xün* 「人」は、例 (49a) 「ドルジは良い人だ」のように、修飾語を伴って述語として用いられる場合には問題なく許容される。

- (49a) Dorž bol **sajn** xün.
 PN.NOM FP 良い 人.NOM
 「ドルジは良い人だ」

その一方で、(49b), (50a) に示したように、*xün* 「人」が修飾語を伴わずに単独で述語として用いられている例は、前後に適切な文脈がない場合には許容度が低い。しかし、*xün* 「人」が修飾語を伴わずに単独で述語として用いられていても、(49c), (50b) のように、適切な文脈に置くと、許容されるようになる。

- (49b) ? Dorž bol **xün**.
 PN.NOM FP 人.NOM
 (ドルジは人だ)

- (49c) Dorž bol **xün**. Araatan šig büdüüleg am'tan biš.
 PN.NOM FP 人.NOM 獣 ~のように 獐猛な 動物.NOM NEG
 「ドルジは人だ。野獣のような獐猛な奴じゃない」

- (50a) ? Bi **xün**.
 私.NOM 人.NOM
 (私は人だ)

- (50b) Bi=č xün. Tïjm boloxoor burxan šig
 私.NOM=FP 人.NOM そのような ~だから 仏 ~のように
 tögs tögöldör biš šüü.
 完全な 完全な NEG MP
 「私も人だ。だから仏様のように完璧ではないよ」

「適切な文脈があれば、普通所有物に *-TAJ* が付いて派生した語が、修飾語を伴わなくても「単なる所有」を表すことができる」現象が、「ごく当たり前のことをわざわざ表現することは通常ない」という人間の言語活動一般に観察されることの反映であることが、(49) や (50) のような例から分かる。

5節での考察をまとめると次の通りである。(42) に述べたように、派生接辞 *-TAJ* が、修飾語を伴わない「普通所有物を表す名詞」に付加される場合には、当該の名詞の表すものが特別なものであること、あるいは、当該の名詞の表すものを豊富に有していることがしばしば含意される。しかしその一方で、適切な文脈があれば、普通所有物に *-TAJ* が付いて派生した語は（修飾語を伴わなくても）「単なる所有」を表すこともできる。普通所有物を表す名詞に *-TAJ* が付いて派生した、修飾語を伴わない語が（特別な文脈がない限り）「単なる所有」を表さない現象は、「当然のことをわざわざ表現することが日常においてほとんどない」ことと関連していると考えられる。

6. 派生接辞 *-TAJ* による派生語が文末述語表現として用いられる場合の文構造

2.2節で触れたように、*xereg*「事、必要」から派生した *xereg-tej*「～する必要がある」や、*jos*「道理」から派生した *jos-toj*「～するはずだ」など、*-TAJ* により派生したいくつかの語は、直前に内容を表す形動詞節（連体節）を伴い、文末に現れることで、ある種の述語を形成する。

- (51a) Bid ene muu zuršl-yg tasla-n zogsoo-x xereg-tej.
 我々.NOM この 悪い 習慣-ACC 切る-CV.ASS 止める-VN.NP 必要-PROP
 「我々はこの悪い習慣を断ち切る必要がある」

(51a) は意味的には、「我々が、この悪い習慣を断ち切る必要を持っている」と解釈でき、[[*Bid*] [[[*ene muu zuršlyg taslan zogsoox*] *xereg*]-*tej*]] のような構造を持っていると考えられる。すなわち、*xereg*「必要」が *ene muu zuršlyg taslan zogsoox*「この悪い習慣を断ち切る」という形動詞節（連体節）により修飾されている。そして *ene muu zuršlyg taslan zogsoox xereg*「この悪い習慣を断ち切る必要」に *-TAJ* が付いて *ene muu zuršlyg taslan zogsoox xeregtej* 全体が述語になり、文の主語として *bid*「我々」が現れている構造である。

ところで、(51a) 中の *bid*「我々」の位置を変えて、下の (51b) のように表現することが可能である。

- (51b) Ene muu zuršl-yg **bid** tasla-n zogs00-x **xereg-tej**.
 この 悪い 習慣-ACC 我々.NOM 切る-CV.ASS 止める-VN.NP 必要-PROP
 「この悪い習慣を我々は断ち切る必要がある」

(51b) が許容されることを考えると, (51a) の下で意味的な観点から想定した [[*Bid*] [[*ene muu zuršlyg taslan zogs00x xereg-tej*]]] のような構造 (*bid* 「我々」が *ene muu zuršlyg taslan zogs00x xereg-tej* 「この悪い習慣を断ち切る必要持ちだ」の外側に位置する構造) は適切でないことになる. すなわち, 文末に現れている *xereg-tej* の *xereg* という語基に形動詞節 (連体節) が修飾を加えている構造を想定するのではなく, むしろ (あくまで分析の一例に過ぎないが), *xereg-tej* を (直前に形動詞を要求する) 文末助詞のようなものとして分析するなどの可能性を検討したほうが適切であるように思われる²⁶.

このように, *-TAJ* による派生語が, 直前に形動詞節を伴って文末に現れる表現はモンゴル語に多く存在し, 頻繁に用いられる. 本稿で挙げた *xereg-tej* 「～する必要がある」, *jos-toj* 「～するはずだ」以外にも, *janz* 「様子」→*janz-taj* 「～のようだ」, *šinž* 「兆候」→*šinž-tej* 「～のようだ」, *sanaa* 「考え」→*sanaa-taj* 「～するつもりだ」, *žišee* 「例」→*žišee-tej* 「～する事例もある」, *udaa* 「回」→*udaa-taj* 「～した事例もある」などが挙げられる.

こうした *-TAJ* を含む語すべてについて, ((51b) のように) 主語名詞句の位置を変えることが可能かどうか, 調査を行なったわけではない. 今後 *xereg-tej*, *jos-toj* だけではなく, 派生接辞 *-TAJ* による他の派生語についても調査を進める必要がある.

7. まとめと今後の課題

本稿ではまず2節で, 派生接辞 *-TAJ* に関する特徴を, 先行研究での指摘を交えて概観した.

3節では派生接辞 *-TAJ* が屈折接辞的な特徴も有していることを指摘した.

次に4節で, 先行研究の主張を検討することで, 述語修飾語中の *-TAJ* が, 派生接辞と共格接辞のどちらであるかを区別することが, 場合によっては難しいことを指摘した. また, 派生接辞 *-TAJ* と共格接辞 *-TAJ* を区別する方法として先行研究で挙げられているものの中には, 有効性に疑問のあるものや, 適用範囲が限られているものがあることを示した.

5節では, 派生接辞 *-TAJ* が修飾語を伴わない「普通所有物を表す名詞」に付加される場合には, 当該の名詞の表すものが特別なものであること, あるいは, 当該の名詞の表すものを豊富に有していることが含意される傾向が認められるものの, 「単なる所有」も表しうることを示した.

²⁶ 風間 (1999: 97) は, Bosson (1964: 54) が挙げている, 文末に *xereg-tej* や *jos-toj* (さらに *üüreg* 「義務」から派生した *üüreg-tej* 「～する義務がある」) が現れる例について「助動詞のような役割を果たすようになっている」と述べている. *-TAJ* による派生語のこうした用法に関する風間 (1999) の記述は簡略なもので, 根拠も特に示されていない. しかし, *-TAJ* による派生語が文末に現れる用法を, (*-TAJ* の) 他の用法とは区別するべきであることを示唆している点で, 重要な指摘であると思われる.

最後に6節では、派生接辞 *-TAJ* による派生語が、文末述語表現として用いられる場合の文構造について考察した。そして、*-TAJ* の付加先である語基に形動詞節（連体節）が修飾を加えている構造を想定することが、適切ではない可能性を指摘した。

本稿では、形態（主に3節と4節）、統語（主に6節）、意味（主に5節）の観点から、派生接辞 *-TAJ* に関する諸現象について、考察結果を箇条書き的に述べる形式をとった。これらの考察は断片的なもので、派生接辞 *-TAJ* に関して不明なことはまだ多く残っている。また、本稿では、欠如を表す *-gij* についてはごく簡単に紹介しただけで、その特徴について議論することはできなかった。これらのことについては、今後の研究で取り組みたい。

略号

2ND	second person 二人称	MP	modal particle モダリティー小辞
3RD	third person 三人称	NEG	negative 否定
ABES	abessive 欠如	NOM	nominative 主格
ABL	ablative 奪格	NP	non-past 非過去
ACC	accusative 対格	OPT	optative 希求
ASS	associative 連合	PAST	past 過去
CON	conditional 仮定	PL	plural 複数
CV	converb 副動詞語尾	PN	personal name 人名
DAT	dative-locative 与位格	POSS	possessive 人称所属
DS	derivational suffix 派生接辞	PROP	propriative 所有
EP	epenthesis 音添加	QP	question particle 疑問小辞
FP	focus particle 焦点を表す小辞	REFL	reflexive possessive 再帰所属
GEN	genitive 属格	TV	terminating verbal 終止語尾
HAB	habitual 習慣	VN	verbal nominal 形動詞語尾
IMPF	imperfective 未完了	VOL	voluntative 意思
INS	instrumental 造格		

参考文献

- Binnick, Robert I. (1979) *Modern Mongolian: a transformational syntax*. Toronto/Buffalo/London: University of Toronto Press.
- Bittigau, Karl Rudolf (2003) *Mongolische Grammatik: Entwurf einer Funktionalen Grammatik (FG) des modernen, literarischen Chalchamongolischen*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Bosson, James. E. (1964) *Modern Mongolian: a primer and reader*. Uralic and Altaic Series, Vol. 38. Bloomington: Indiana University Publications.
- 橋本邦彦 (2010) 「存在と所有の間—モンゴル語の存在文と所有文の意味論—」『北海道言語文化研究』8: 105-127.
- 風間伸次郎 (1999) 「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について

て」 *Altai Hakpo* 9: 93-124.

Khurelbat, B. (1998) *Mongolian word formation*. Ulaanbaatar: Publisher unknown.

Kullmann, Rita and D. Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*. Hong Kong: Jenco.

栗林均 (1992) 「モンゴル語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 下-2』 501-517. 東京: 三省堂.

Luvsanvandan, Š. (1968) *Orčin cagijn mongol xelnij bütec: mongol xelnij üg, nöxcöl xojor n'* [Structure of Modern Mongolian: words and inflectional suffixes in Mongolian]. Ulaanbaatar: B.N.M.A.U. Šinžlex Uxaany Akadjemi.

Önörbajan, C. (2004) *Orčin cagijn mongol xelnij üg züj* [Morphology in Modern Mongolian]. Ulaanbaatar: Mongol Sudlalyn Surguul', Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul'.

角田太作 (2009 [1991]) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 東京: くろしお出版.

Proprietary Suffix in Mongolian

Hiroyuki UMETANI

(Researcher at the Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo)

This article, one of the papers featuring “Semantic and syntactic analyses of proprietary affixes in the languages of North-Eastern Eurasia”, aims to provide an overview of the proprietary suffix *-TAJ* in Khalkha Mongolian, and then to examine some aspects of the suffix. The main topics to be discussed in the latter part of the article are as follows: Firstly, it is claimed that the proprietary suffix, which has been classified as a derivational suffix, shares some characteristics with inflectional suffixes. Secondly, we explore the relationship between the proprietary and the comitative suffixes: one topic that has long been under discussion in Mongolian studies because the discrimination (or the identification) of the two suffixes is not easy due to their identical phonological shape. Thirdly, some semantic characteristics of the derivatives formed from attaching *-TAJ* are pointed out, focusing in particular on the semantics of the base. Finally, a possible analysis of sentences is presented where derivatives using *-TAJ* such as *xereg-tej* “it is necessary to do ...” and *jos-toj* “ought to ...” appear in the final position.

(うめたに・ひろゆき humetani@L.u-tokyo.ac.jp)